

健康文化

「告知」の後のつきあい

宮田 伸樹

Aさんは最初は患者であったが、随分親しい友人となった。教えられることも多かった。家族も含めてのつきあいだった。ホジキン病と云う病気で私が診たのだが、大変ながんばりやだった。放射線治療で口内があれた時は、口の真ん中からは痛くて飲めないで口のはしから重湯を涙を流しながら呑みこんだ、と後に私に告白した。奥さんが見に行くと、病棟の廊下を逆立ちで来る患者があって、主人なのでびっくりしたと云った。体力をつける努力だったと云う。

昔、検問にあった時、免許証を要求する警官に言下に警察手帳を見せると 反論した。わんぱく坊主がそのまま大人になった感じだった。率直だった。素直だった。

ホジキン病がよくなってから親しくなって、お世話になった。よく気をつくる人で、自動車工場の社長だったから、車の点検などを依頼すると内部まできれいに清掃してあって、その上に季節のものがさりげなく置いてあった。9年たってから別の病気が左胸にできた。外科で手術をしてもらったが、再発した。四度の手術をし、最後の手術は背中中の筋肉を移植する大手術だったが、それでも再発した。もう手術は無理だったが、抗癌剤も放射線治療も無効だった。右腕の腫瘍はだんだん大きくなり、自分で見える。外科に入院して、手術はもうできない事を教えられても、表面上は変わらなかった。しかし、心中では苦悩があったのだろう。長男は成人前で、第三子は高校一年だった。

毎日、時間を作ってお見舞いに行った。先生が来て下さるのを主人が非常に楽しみにしていますと、奥さんも云われたから。全身状態は徐々に悪化する。ついに主治医から、起き上がらない様にと云われた。

目の下に、左胸の腫瘍が日々に大きくなってくのが見える。出血もある。手術もできないと云われている。もうベッドからも出られなくなった。私は主治医から聞いてAさんの今の状態、これからの予後を知っている。Aさんもまた、私が知っていることを知っている。お見舞いに行っても格段のことは何も

話せなかった。当りさわりのないことを云えば当りさわりのないことを答えた。私にはハキハキと答えた。意識は明瞭で、死亡する二日前にはじめて、病室を出ようとする奥さんに、一人だとノイローゼになりそうだから早く帰ってきて一緒に居てくれ、と云った。

死に到る病は「癌」のみではない。然し、告知が問題になってからは「癌」があまりにも有名になった。Aさんも癌の一種であった。告知された患者は、時間が充分にあれば、怒りや反抗、絶望、諦めや諦観、そして受容の段階に到ると云う。

その段階にAさんはすすんでいただろうか、すすまなかったらうか。Aさんの人生の終りに私は精神的に役に立たなかったのだから。立てなかったのだ。どう接して良いのかが分からなかった。私がしっかりした考えをもっていない為だ。

患者が、特に親しい人だったりすると告知の後で医師は苦しむ。癌の告知がむずかしいのは、告知の後が医師にとってむずかしいからだ。日本人の人生観、死生観では云わず語らずに知らせる、云わず語らずに悟らせるのが最も良いのだろうか。それよりももっと良い方法があるのだろうか。私はAさんには云わず語らずに語ったのだった。

七七忌が納骨で、会食では沢山のご馳走があり、Aさんの写真が正面にあった。入院の前の写真だから、歳よりも若い顔で笑っているのが、かわいくて悲しかった。

(愛知医科大学教授放射線医学教室)